恵みに満ちた人生　　詩篇 23:1～6

詩篇 23 篇は「言葉で書かれた絵」です。これを読み、暗唱するとき、目の前にひとつの風景が浮かんできます。雲ひとつない青い空、その下にどこまでも続く緑の牧草。そこに小川が流れ、水面は陽の光を浴びてキラキラ輝いています。羊たちは、そこで、満腹するまで草を食べ、渇きがいやされるまで水を飲んでいます。小羊は駆けまわり、疲れたら、安心して眠ります。平和で恵まれた状態です。この詩篇はイスラエルの王となったダビデによって書かれましたがどんな思いでこの詩篇を記したのでしょうか。そのことを心に留めながら、ご一緒にこの詩篇を読み、ダビデに示された神様のみ心が今朝私たちにはどう示されているのか見てゆきたいと思います。

この詩篇の最初に**「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない」**と書かれています。この詩篇の著者ダビデ自身羊飼いであり、羊飼いの息子でした。ですから羊が豊かに育つも惨めな生涯を過ごすのもすべて羊飼いにかかっていることを知っていたのです。主イエスは**「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」（ヨハネ 10:11）**と言われました。ここにおいてはダビデ自らが羊の立場に立って「主はわたしの牧者です」と告白できることを語っています。主イエス・キリストを私の良い牧者として告白できることに優る幸いはありません。以前、親しくさせていただいていたあるクリスチャンの心理学者の方は私に「森田先生、私にはお金も財産も、はたまたこれといった名誉や地位もないのですが持っている友人関係の豊かさには自信があります」と言った時、それこそ一番の幸せであり、彼の財産だと思いました。ダビデがここで「私は乏しいことがありません」と言った時に何も無くともこの関係があれば余裕を持って生きていけることを語っているのです。人の人生の行き先に違いをもたらすのは良い牧者を知っているかどうかであり、それはすなわち良い牧者なる主イエスとの関係でもあるのです。

「主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます」2 節

緑の牧場に伏すとはまさに牧歌的な光景です。「伏す」と言っても羊は４つの条件が満たされない限り、横になること、伏すことはまず無いそうです。それは 1)臆病なため、恐れが無い時にしかダメ　2）三密を避けるではありませんが他の羊から離れていること　3）はえや体内の寄生虫などが無い状態でしか無理　4）食べ物があることで、それらが一つでも不足していると伏すことはないということです。羊が心配なく休むためには恐れ、緊張、怒り、飢えから解放されている必要があります。しかも緑の牧場と言ってもダビデが羊飼いをしていたパレスチナでは殆どが乾燥した褐色の荒野ですから緑の牧場を見つけるのではなく、途方もない時間をかけて牧場が作られたということなのです。このようなことから緑の牧場に伏すことが出来、そこで美味しい水を飲むということはこの上無い幸せで祝福された時でもあるのです。良き牧者である主イエスは私たちにそのような幸いな人生が約束され、備えられているように今も愛をもって天の御座において羊である私たちのために執り成し祈り、働いていてくださるのです。

「主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。」3 節

「私のたましいを生き返らせ」ということは死んだような状態にあったということを意味します。良い牧者の配慮の中で生きているのであれば、回復を待ち望むような悩みと憂いは無いのではないかと思います。これを書いたダビデはどうだったのでしょうか？　彼は神に大いに愛された者であっても苦難と試練のゆえに失意のどん底に落ちることがあることを知っていました。ダビデは生涯の中で敗北を味わ

い、誘惑に負けて落ち込むという挫折感をもったことがあります。絶望的な気持ち、無力感に苛まれるという経験をしていました。実は羊が危険な状態になるのは倒れて仰向けになったままでいることだそうです。一人で起き上がることが出来ないし、もがけばもがくほど皮がむけて、ガスがたまってきて危険な状態になるそうです。ですから一刻も早く、起こしに行ってやらないと死んでしまいます。ですからもし1，2 頭が見えないと羊飼いが先ず思うことは迷子になっているというより、どこかで倒れているのではないかということです。倒れている羊を探すのは羊飼いだけではなくはげたかやオオカミも狙っています。そして倒れるのは最も大きく、最も肥った、最も強い羊、時には健康な羊でさえ倒れて、死傷することがあるので羊飼いは油断することなく気を付けているということです。もうこれで大丈夫ということはないのです。ダビデが人生において敗北を味わい、打ちのめされたような時、また誘惑に負けて挫折した時は彼自身、人間的に自信を持ち、繁栄のゆえに信仰的に高嶺にあると自負していた時でした。私たちも、人生の中で最も自信をもっている時につまづいたり倒れたりすることがあり、信仰的に高くあるように見える時に実は下り坂に入っていたということがあります。パウロは**「ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい」（コリント第一 10:12)**とコリントの教会の人たちに警告しました。

次に**「御名のために、私を義の道に導かれます。」**ということですが羊は非常にくせのある動物で放っておかれると、いつも同じ道を通り、それ以外の所を通らないそうです。そして同じ所にある草を食べて、それを繰り返すのでそこが荒野になってしまいます。そもそも最初から道などありません。羊飼いが先の先まで計画を立てて、道を作り、良い土地にしてゆくのです。羊飼いが綿密な計画を立てて、羊たちを指導する必要があるのです。**「人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である」箴言 14:12** とありますがダビデが義の道、すなわち正しい道に導かれると言ったのは具体的な道というよりも神様のみこころにそった計画と言えます。

「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」4 節

この句は死の暗い谷を通っている人々への慰めのために用いられます。「死の陰の谷」ということばで何か不気味なところに入っていくような印象を受けますがそうではありません。山には谷があります。そして谷に沿って上るのが頂上に達するための最上の道です。確かに暗い中を通ることもあるでしょう。それは人生において挫折、困難、無味乾燥な中を歩んでいるのかもしれません。しかし、主と共に歩む時に神の道は私たちの人生の谷を通って上に向かっているのです。山登りをした時に薄暗い森の中や、少し危険な場所も通って頂上について美しい景色を見た途端、この景色を見るために今までの過程があったのだと思います。神の国についた時に困難に直面した時や辛かった時を思い返しながら、それでも主イエスが私と共にその時居てくださったことに気づかされるのです。また谷は山頂への道だけではなく、大抵その横には川が流れています。いつでもさわやかな水を得ることができます。私たちも人生の谷にいる時にこそ、神ご自身がいのちの水をもって私たちを癒し、元気づけてくださることに気づきたいと思います。

「あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」

中東では羊飼いはむちとつえではなくこん棒とつえを持つと言うことですがむちあるいはこん棒は羊と羊飼いを守るためにつまり猛獣や敵から守るために用いられます。また杖は羊を引き寄せたり、少しつついたりして気づかせたり、毛が枝なのでからまっているのをほどくために使われます。決して杖で羊を叩いたりはしません。神様は私たちが手に負えないことに対しては守ってくださいます。ですから私たちの祈りは「我らを試みに会わせず、悪より救い出したまえ」です。しかし、私たち自身が原因となっているもの、例えば自分の頑固さ、自己主張、高いプライドなどは聖霊によって気づかせ、助け出してくださいます。

まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。6節

羊は悪い羊飼い、いい加減な羊飼いに世話されると最も破壊的な家畜となります。彼らはすぐに取りかえしがつかないくらい土地を破壊し、荒らしてしまいます。もちろん羊自身も品質が落ちてしまいます。しかし良い羊飼い、ベテランの羊飼いに世話されるとあらゆる家畜の中で最も有益なものになるということです。例えば羊の糞は放牧地に効率よくまき散らすと、土壌をすばらしく改良する役目を果たします。そして荒れた土地を2，3年のうちに回復させるということです。つまり羊の通った後には価値のある、生産力のある、美しい有益なものを残した。豊かな土地を残したということです。

このことは私たちの人生にも問われることです。立つ鳥後を濁さずではありませんが私の後ろに祝福と感謝が残るだろうかということです。みことばは「いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。」とあります。この「追ってくるでしょう」とは「残す」ということと同じです。人々の心の中に私のことが思い出される時にいつくしみと恵みが重なりあって出てくるでしょうか？　それとも私のことはすっかり忘れたいと思うでしょうか？　私がうしろに積み残したのは祝福でしょうか。それとも私は他の人々にとって、わざわいなのでしょうか？　私の生涯は人々にとって喜びでしょうか？　それとも痛みでしょうか？　ダビデはいつくしみと恵みが追って来る。残っていると言いました。いつまでも主の家に住まいましょうと彼は主なる神を第一として歩んできたがゆえに何にも代えがたい神様の恵みと真実を味わっているのです。

皆さんは、主イエスを「わたしの牧者」としていますか。「主よ、あなたはわたしの羊飼いです」と告白していますか。羊飼いである主に従う心と姿勢を保っていますか。主をわたしの羊飼いとする信仰をいただいたのに、そこから心が離れてしまってはいませんか。主によってしか満たされないものを、他のもので満たそうとしていないでしょうか。「主はわたしの牧者」という信仰がなければ、ほんとうの意味で「わたしには乏しいことがない」と言い切ることはできません。しかし、「主はわたしの牧者」ということができれば、たとえ、わたしたちが弱く、傷ついていたとしても、そこが「死の陰の谷」であっても、わたしたちは、「わたしには乏しいことがない」ということができるのです。わたしたちを満ち足らせてくれるもの、それは「緑の牧場」や「いこいの水のほとり」そのものではなく、そこに導いてくださる主ご自身なのです。恵みに満ちた人生を神は私たちに味あわせようとされています。今週の歩みも良き牧者なる主イエスに導かれて歩んでまいりましょう。